
永遠につづく記憶

魚住すくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠につづく記憶

【Nコード】

N5630M

【作者名】

魚住すくも

【あらすじ】

書籍が全て、データにとってかわった近未来。人の訪れることの無い、図書館に一人の少年が訪れた。

室内には、エアコンの音だけがひびいていた。綾介は先導する少女を追って、足を進める。かなりの広さなのに、ところせましとならべられた本だなで、せまつくろしく感じられる。

本だなには、びっしりと本がならべられていた。うっすらとほこりがたまっている。

その部屋からでて、階段をのぼれば、先ほどの部屋と同じぐらいの広さの部屋があらわれる。

この部屋は、さきほどのよりも、広々とつかわれていたらしく、本だなの他に、机やいすがおいてあった。

すすけた、ガラスのドアには、プレートがあり、それに、

『ガイア・オールド・ライブラリー 自由におはいり下さい』

と、ほってあった。

さかのぼること、二時間前。

綾介は、一人で、荒れ野を歩いてきた。時おりふいてくる強い風が砂をまきあげる。彼の黒いコートは、土色っぽくなっていった。

(ここらへんだろうか?)

綾介は、周りを見わたした。黄土色の岩がちらほらと見える。

彼は、ふとたちどまる。目の前にある、大きな岩を押す。ごりつと岩がこすれる音がして、四角い岩の板がおちた。

大きな岩山の中は、空洞だった。

綾介はコートのポケットから、懐中電灯をとりだして、つけた。ぼつと、オレンジ色の小さな光がつく。

綾介は、小さな光をたよりに奥へと進んでいった。やがて、前方に、にぶく光るものがあらわれた。綾介は、すこし身がまえるが、それが、ガラスに反射した光だと気づいて力を抜いた。

ガラスのドアの前には、小さな看板がある。それを読んで、彼は、緊張をといた。どうやら、目的地にやっと着いたようだ。

「すみません。だれか、いますか？」

綾介は、目に見えないだれかに話しかけるように言った。

ちよつとすると、ガラスの向こうに、電灯がついた。

『ようこそ、いらっしやいませ。ここはガイア古書籍図書館です』人間そっくりに、作られた合成音があった。

スーっと、ガラスのドアが開く。綾介は、足をすすめた。

ふいに、前のほうに、ぼつ、と人かげが見えた。綾介は足を止める。

「だれだ？」冷静をよそおうとしたけれど、声がうわずった。

「おどろかせてごめんなさい。私は、館内自動検索システム『リブ』です。」

「どのような本をお探しですか？」

「え、ああ……」

綾介は、面くらったように、前にいる人を見た。……本当に、人にしか見えない。

黒いトレーナーとズボン。その上から、まっ白なエプロンをつけている。

そして、顔は、何の変哲もない、少女のそれだ。

（なんで、こんな所に人がいるんだ？ というより、こんなところで人が住めるわけがない……）

げんなり顔をする綾介に少女は、

「ああ、この姿は、ホログラフによる立体映像なんです。実体は、ありません」

「ああ、なるほど……」綾介は、ふつと緊張をといた。

「それで、何をおさがしにいらしたのです？」

綾介は、ようやくこの図書館に来た理由を口にする。

「人を探しているんです。」あやこ” という名まえの女性を探しているんです」

リブと綾介は、暗い書庫の中を歩いた。

「ずいぶんと、ひっそりしていますね」

綾介の言葉が響いて、奥の方へ吞まれていった。省エネ設定になっているのか、リブと綾介が動いたたびに灯る照明も移動していく。

「人がこないですから。あなたの前に来たのは、ざっと二十年は昔だったわ」

そのことばを聞いて、おもわず綾介はふりかえった。

「二十年ですか？ そりゃあまた……」

想像はしていたが、あまりのことに言葉を失った綾介に、リブは笑みをかえした。

「今どき、本をわざわざ読みにくる人なんていませんよ。アカデレコードにアクセスすればすぐ見れますからね。」

「この本のデータも、その時ぐらいにはアカデレコードに登録されているわ」

「……父さんが言ってたんだけど、昔はこういうもので勉強していたんですよね？」

「そうよ。あら、あなた学生なの？」

「今年で高校生になります」

「そうなの……さあ、ここよ。これとこれと、これ」

リブの言うままに本をとる。

「こ、この中からしらべるんですか……？」

本のぶ厚さに綾介はおもわずたじろいだ。一冊がゆうに千ページはこえている。半端な量ではない。

「文句いわない、いわない」リブは、ぼうぜんとしている綾介に、にが笑いした。

リブが選んだ三冊をつくえの上におく。索引からあやことという名

前の人間を見つけていく。

「漢字とかは、わからないの？」と、人名事典をのぞき見ながらリブは聞いた。

「うん……。わかってることは、あやこっっていう名まえと、有名な書誌学者の娘だったことだけ」

綾介は、顔もあげずに言った。

「その書誌学者の名前はわかるかしら？」

リブの問いに、綾介は首を横に振った。

しばらく、二人ともなにも言わなかった。本をめくる音やリストアップした名前を書きこむ音だけがひびく。

一冊分を見て、綾介は、ぐうっと、背をのばした。

「ああ、腹へったなあ」

かれこれ、ここに来てから一時間はたっている。そろそろ夕ぐれ時にちがいない。

「ラウンジに移動しましょうか？ ごはんは持っているのでしょうか？」

リブの問いかけに綾介はうなずいた。

ラウンジは書庫があった階の下にあった。

二人は向かいの席に座った。

綾介は、持ってきたパンをもくもくと食べた。

ふと、リブが、

「失礼かもしれないけど、何故、あやこさんという方を探しているの？」と聞いた。

しばらく、リブを見つめていたが覚悟をしたように、

「母親らしいんだ」と、言った。

3 (後書き)

今晚は、魚住です。

もともと書いていた話だから、すぐ更新出来ますとか言っておきながら、あれよあれよといううちに二ヶ月も経っていきまして、ほんっとーに申し訳ありません。

ひっそりと更新させていただきます。

「まあ……」リブは、口に手をやった。

そんな様子におかまいなしにつづける。

「父さんが亡くなる間に、はじめて母さんのことについて聞いたんだ。ガイア古書籍図書館に行かってね」

まるで、リブにというより自分にいきかせるように話した。

今でも、ありありと思いだせる。顔色が土気色になっても、自分に、伝えようとする父の姿。じよじよに冷たくなってくる父の体。

「ごめんなさい、聞いたりして」

「いや、いいよ。この図書館に来たら、聞かれると思っていたからね」と笑った。

ふたたび、二人は書庫へともどった。今度は二人ともしやべらずに作業をつづけた。

三冊すべて終わった時にはすでに真夜中になっていた。

「あなたのお母さまは、いらっしやいましたか？」リブは、綾介の手もとにあるリストをのぞき見た。

リストにずらりと書かれた名まえ。明らかにちがうものに、横線をひいて消す。

「さあ……。いっぱいいるからわからないよ」

しばらくして、

「ああ、絶望的だよ、この数！」

綾介は、ぼんと、シャーペンを机の上に投げつけた。両手を頭の上で組んで、ため息をついた。

「見つかるのかなあ……」ぼそっと、綾介はつぶやいた。

「せめて、祖父さんのプロフィール判ればなあ」

リブはそんな綾介を見て、

「そんなに思いつめたら、よくないわ。明日にしたらどうかしら。」

休めばいい案がでてくるわ」と、ふわりと、笑いながら、言った。

そんなリブを見て、綾介は苦笑いを浮かべる。

「そうだな。もう、明日にするか」

そう言っつて、立ちあがって、かるく背のびをした。相当疲れていたらしく、腰がゴキツとなった。

ラウンジにあるソファは、そうとう良いものらしく、寝心地は抜群だった。

「じゃ、おやすみなさい」リブは、そう言っつて、去ろうとした。

「待って！」

自分で意識するよりも早く、綾介はリブを呼んだ。

「どうしたの？」首をかしげるリブ。

「そう言えば、君にはじめて会った気がしないんだ。何か、どこかで会っつたような気がする。」

「……ごめん。変なこと言っつて」

そう言っつて、布団がわりのコートを頭からかぶつた。

背中ごしで、リブがふつとほほ笑む心配がした。

「そうね。わたしも、あなたに会っつたことがあるような気がするわ」

うす暗い図書館の中に、規則正しい安らかな寝息が聞こえる。

よっほど疲れていたのか、綾介はすぐに眠っつてしまった。

リブはそこかたわらで膝を抱えて座っつている。まるで瞑想するかのようによ目を閉じつていた。

ふいに痙攣したかのように、ピクリと身体を動かす。目を開けて、視線を綾介の方に向けた。

「やっぱり、この子がそうなのね。この日のためにわたしを造つたのかしら……」

リブの呟く声は図書館の闇に吸われ、やがて消えていっつた……。

次の日も、辞典との根比べが続いた。

「父さんの話だと、同い年だって言われたから……だいたいアカデレコードが出来たぐらいか」

そう綾介は言いながら、その時代の年鑑を二、三冊、棚から引っぱり出す。人名事典とさほど変わりのない重量感。

（明日はきつと筋肉痛だな、こりゃ）心の中で秘かに溜息をついてみる。

お祖父様が著名な方なのでしたら、とリブが提案したのは簡単な朝食を終えた時だった。

年鑑などでそれっぽい人をピックアップして、プロフィールを洗いだす。気の遠くなるような作業だが、やらない言い訳にはならない。

「ねえ、そういえば、ここってアカデレコードの専用端末って……」
本から顔をあげて綾介が尋ねようとすると、リブは困った顔をした。「……ないんだね、やっぱり」苦笑しながら綾介は言う。

「ごめんなさい。利用者の方の要望に答えられないなんて、館内検索システム失格ですよね……」

ここは、ネットワークから外れているんです。サイバー攻撃から防御するために」

綾介は眉をひそめた。

「そんなことをする必要が……本か？」

リブは肯いて、答える。

「アカデレコード全盛になったとはいえ、オリジナルの価値は下がりませんし。」

でも、最大の理由はわたしですね」

リブの言葉に、綾介は首を傾げる。

「わたしは高性能AIシステムです。もし外部に乗っ取られなくてもすれば、大変な事態になりかねない。それで、ここはネットワークからあえて外してるの」

「……そうなのか」嘆息をつきながら、綾介は言った。

つまり、綾介が来るまでリブはこの図書館にひとりぼっちで待っていた、ということだ。二十年も。

「寂しく、ないの？」少し言い辛そうに尋ねると、リブはにっこりわらって首を横に振った。

「わたしは、人間を模したものであって、人間ではありませんから。時間、という感覚もあなたとは違うの」

だから、気にしないでという風にリブは微笑んだ。

岩石で出来たトンネルを抜けると、見渡す限りの荒野が目に入る。綾介の母親探しは、完全に行き詰まっていた。気分転換のために一度、外を散歩しようと思ったのだ。

空を見上げると、物凄いスピードで雲が流れていく。綾介は入り口の岩石の側に座り、見るともなく、それを眺めていた。

(アカデレコードが使えないのが、ネックなんだよなあ) 心の中で独りごちて、溜息をつく。

なんでよりによって、原始的なやり方で探さなきゃいけないんだ。綾介はひざに顔を埋めた。

近所のパブリックライブラリーに行った方が、早く見つかるかもしれない……。

しばらく顔を埋めたままで、じっとしていた。風の音、遠くで鳴く鳥の声に耳を澄ませる。

うなじに冷たいものを感じ、綾介は顔をあげる。雨が、降りはじめている。あわてて図書館に逃げこんだ。

自動ドアの前で、水滴を払う。

「リブ、雨が降ってきちゃったよ」綾介の声に反応して、ドアが開いた。

「おかえりなさい。……大丈夫？」心配そうに聞くリブに、
「ただいま。」

今日はもう、休むことをするよ」と答えた。

『ガイア古書籍図書館へ行け……。そうすれば、全てわかる』

綾介は、父の手を取った。

『父さん！ しっかりしてよ！』叫ぶように綾介は言う。ともすれば泣きそうになるのを、男の意地でこらえていた。

『綾介……。人は、永遠には生きられない。だからこそ、子孫を残し、思いを伝えるのだ……。』

父の手は、骨ばっていて、すでに温もりを失っていた。

『あやこ……。綾介を導いてくれ……。』

それが最後だった。

『……。父さん？ 父さん！』今まで我慢していたものが一気にあふれ出した。

「父さん……」

熱い涙が、ころりとこぼれ落ちた。ここ最近、いつも、父を看取った時の夢ばかり見てしまう。

朝はいつも憂鬱だ。起き上がって、涙をぬぐう。こんな顔、リブには見せられない。

身支度をしている時、ふと頭の中によぎった。

（なぜ、ガイア古書籍図書館なんだろう？ 他の図書館でも人名辞典はあるはずなのに……）

そわそわとラウンジの中を動きまわる。ばらばらにされていたパズルが、一つにまとまろうとしている。

「……まさか」彼は立ち止まってつぶやいた。あまりにも突飛な仮説だった。でも、一番、当たっているような気がした。

「リブ、リブ、ちょっと来てくれ！」綾介が呼びかけると、すぐに、「どうしましたか？」と、現れた。

「この図書館についての資料は、どこにあるんだ？」綾介は、リブ

の目を見つめて言った。

リブは、驚きに目を見開いた。その後、顔をそむけながら、「なぜ、そのようなことを？　ここは、倒れかけの図書館なのよ……」と言う。笑いとばそうとしているが、顔がこわばっている。（やっぱり、何かあるんだ！）綾介の中で、仮説は、確信に変わった。

「ねえ、父さんは、ぼくにここに来るように言ったんだ。他でもないこの図書館に。人の名前なんて、どこの図書館でも調べられるだろう？」

ねえ、リブ、君は一体何者なんだい？」

最後の切り札を叩きつけて、綾介はリブを見据えた。期待と興奮で、胸がいつぱいになる。

リブは、しばらく迷っていたが、やがて、大きなため息をついた。「……わかりました。本当のことを言うわ。でも、その前に、一つだけお願いがあるの」「なに？」

「わたしを、外に連れて行ってほしいの」

これまでにないほど、真剣な表情でリブは言った。

「わかった、連れていく。どうすればいい？」

「とりあえず出口に向かいますよ。歩きながら話すわ」リブは、そう言っただけで歩きだした。

空気がしんとしている。綾介は、リブの言葉を心待ちにした。

「わたしは、あなたの母、土井 彩子よ。でも、そうじゃないとも言えるの」

ふたつの足音が、響く。静かな声でリブは話しはじめた。

「綾介の言ったとおり、この館長はもともと書誌学の博士でね。本がとても好きだったから、自分で図書館をつくってしまったの」

リブは、歩きながら話しはじめた。綾介はじっと彼女を見つめている。

「彼には、一人娘がいた。彩子というね。でも、人一倍体が弱かった。子ども時代は満身に学校に行けなかったわ……。」

この図書館は、彼女のためでもあったのね」

二人は書庫に来た。リブは、一冊の本を手にとる。有名な童話の本だ。

「何とか、大学を出て、彼女はここで働きはじめたわ。そこで、男の人と出会った。……あなたのお父さんよ」

リブは、本を棚に直した。再び歩きはじめる。

「やがて、彩子は、赤ん坊を身ごもった。彼女は産もうとしたわ。でも、館長は反対だった。だって、彩子はとても、子どもを産める体じゃ、なかったから……。」

そう言いながら、階段を昇っていった。一番最初にリブと出会ったところだ。

「彩子は、反対を押し切って子どもを産んだ。」

そして、死んでしまう」

綾介は口を開いた。

「その、赤ん坊が、ぼくなんだな？」

リブは、無言でうなずいた。

「それで、君が、母さんであって、母さんではないというのはどういう意味なんだ？」綾介は問うた。

リブは、少しの間黙っていた。

「館長は、彩子の記憶をもとに、コンピュータープログラムをつくったの。図書館を管理するためにね。それが、わたし『リブ』なの」二人は、ガラスのドアを通過して、暗い上り坂を上った。

「それじゃ、全て知っていたんだな？」

しばらくして、答えが返ってきた。

「ええ。わたしは、あなたが来るのを待ってました」

晴れやかな笑みを浮かべて言った。今まで、リブは笑みを絶やさ

なかったが、この時の笑みは何かが違っていた。

「雨が降ってる……」

ぽっかりと開いた岩山の穴から、雨の湿ったにおいが、ただよってきた。

「そうなのね、これが雨なのね……」

そう呟きながら、リブは、くらりとくずおれた。

「リブ？」

綾介は、血相を変えて駆けよった。

「どうしたっていうんだ？」綾介は叫んだ。リブの姿が、消えそうになっている。

(まさか、雨のせいなのか?)

図書館内のコンピューターだ。防水加工などされているわけがない。綾介は唇を噛んだ。

「ありがとう、わたしの願い、叶えてくれて」リブが言う。

「館長は、わたしのこと”彩子”として見ていたけど、わたしは、違うって思ってた。

わたしは、リブなの。苦しかった。他人の記憶を背負っているみたいで……」

「そんなこと、いうなよ……」

綾介は、呟く。

もう、後戻りできないということを知った。

「ねえ、リブって呼んで、綾介……」

そう言っつて、リブは、ふっとかき消えた。

「リブ、リブ……」

雨の音があたりを埋めつくす。まだ、暖かさの残るチップを握りしめながら、綾介はリブの名前を呼びつづけた。

【F i n】

あとがき

魚住すくもでございます。『永遠につづく記憶』をお送りいたします。

まさか、もともと出来ていた作品を投稿するのにこんなに時間がかかるうとは……。

今年の（2011年）の6月頃から就職をしたりしていて、創作にあまり時間が割けずにはいました。読書や本のレビューとかにハマりだして、そっちばかりに気持ちが傾いてたり……。

何ともちよどい物事のバランスが取れない（泣）。本当にすみませんでしたm（ ）m

ちなみに今は創作の方に気持ちが傾いている状態のようです（笑）。

* * * *

この作品は大学3回生の時に、創作ゼミで書いた作品です。

1、2回生のうちはまだ講義形式で枚数やテーマが決まっています。3回生になってようやく！ゼミに入ること。

ゼミになると書く内容や枚数などの縛りがなくなります。

しめた、とばかりに自分の好きなものをいろいろ取り込んで書いたのがこの『永遠につづく記憶』でした。

5章部分を付け加えたり、表現などを訂正したりはしていますが、基本は執筆当時のままです。

本当はもうちょっと、構成とか練り直すべきだったのですが……。

へたレな魚住ですみませんorz

拙い作品ではありますが、楽しんでいただけたら、幸いです。

2011年12月

魚住すくも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5630m/>

永遠につづく記憶

2011年12月17日01時51分発行